

総合評価結果

令和 3年 3月 17日

研究センター等名	佐賀大学シンクロトロン光応用研究センター
(英 文 名)	Synchrotron Light Application Center, Saga University
設 置 期 間	平成28年 4月 1日 ~ 令和 4年 3月 31日

1. 研究センター等の設置又は研究目的・概要

佐賀大学シンクロトロン光応用研究センターは、佐賀県シンクロトロン光応用研究施設事業を学術的立場から支援・協力するとともに、シンクロトロン光応用研究に関する地域の中核的機能を果たし、かつ学術的な最先端の研究を行う目的で設立されており、シンクロトロン光による世界的な研究の推進、ならびに最先端の技術や手法、装置などの開発研究を通じて、将来を担う人材の教育・育成、未来技術の開発、知的資産の活用、新産業創出・産業高度化等の産学連携拠点を目指している。

2. 総合評価結果

(評価)

設置目的にある「佐賀県シンクロトロン光応用研究施設事業を学術的立場から支援・協力するとともに、シンクロトロン光応用研究に関する地域の中核的機能を果たし、かつ学術的な最先端の研究を行う」ことは、十分達成している。また、「シンクロトロン光による世界的な研究の推進、ならびに最先端の技術や手法、装置などの開発研究を通じて、将来を担う人材の教育・育成、未来技術の開発、知的資産の活用、新産業創出・産業高度化等の産官学連携拠点を目指して」着々と進んでいるように見受けられた。光電子分光とレーザーを組み合わせた装置を高い性能で維持し、研究成果を出していることは評価できるが、その研究成果が広く世の中でインパクトを持って受け入れるまでには至ってはいないように見受けられる。「環境、医療」関連の業績が少ないとの意見もあり、「環境、医療」分野は今後の課題といえる。(評価区分：SS)

(評価コメント)

学内センターというコンパクトな組織でありながら、先端科学計測装置としてのビームラインを長期にわたり維持し研究の成果を出しながら、九州地区のシンクロトロン拠点として学内外への共同利用を積極的に進めていることは十分に評価できる。佐賀大学として、この分野における学術研究への貢献、この地域への社会的貢献を十分に果たしている。

佐賀大学専有ビームラインとして、利用者（特に学術研究）を惹きつけ続けるためには、他の施設に比べ魅力を持ちつづけられるようにビームラインを高度化することが必要であり、他機関との連携強化を含め外部資金獲得の努力を続けてほしい。遅れている「環境、医療」分野への研究領域の拡充は、現有の人員では適切とは思えないため、佐賀大学全体としてサポート体制を強化する中で、重点化すべき領域（エネルギー、測定手法）を戦略的に検討し、県有ビームライン等の利活用を進めることで達成することが望まれる。将来的には、県有ビームラインや九州大学等の専有するビームラインとより密接に連携し、国から重点的に予算配分を受けられる共同利用・共同研究拠点を目指すことを検討すべきである。

総合評価結果

令和 3年 3月17日

研究センター等名	佐賀大学地域学歴史文化研究センター
(英 文 名)	The Center for Regional and History, Saga University
設 置 期 間	平成28年 4月1日 ~令和 4年 3月31日

1. 研究センター等の設置又は研究目的・概要

佐賀大学地域学歴史文化研究センターは、地域（佐賀）の歴史文化の固有性と普遍性を探究することにより、本学の文系基礎学の発展・充実を図るとともに、新たな学問体系としての地域学の創出・発展を目指している。佐賀地域の歴史文化に関わる研究を総合的に推進するために、研究組織は、「考古学」、「国文・文献学」、「洋学・思想史」、「地域史・史料学」の4部門体制をとり、専任・併任教員のほか、学内外の様々な分野の研究者の参画の下それぞれの研究を遂行するとともに、佐賀に即した医文理融合型の総合的地域学の創出を図っている。

2. 総合評価結果

(評価)

限られた専任スタッフ人員、施設環境のなかで、本学の人文学部門（中近世地域史、文学、考古学、医学史）研究基盤を整備、国内でも有数の地域学（佐賀学）を確立した点が評価される。

なかでも本学総合情報基盤センター、附属図書館、国公立研究機関・博物館等との連携構築により整備が進められた「小城藩日記」データベースは、佐賀地域の特色ある文化、歴史にかかる顕著な学術研究成果発信例として高く評価される。当該事業における国際的な枠組みであるIIIF(International Image Interoperability Framework)規格導入をはずみとした所蔵史資料のオープンデータ化の取り組みは、本学研究・教育成果普及と所蔵史資料保存の方向性を示すものであり、学内、国内のみならず国際的な連携強化が期待される。(評価区分：SS)

(評価コメント)

当該センターが蓄積発展させてきた地域学（「佐賀学」）を市民、地域経済界等の幅広い理解と支援に取り込んで、それらを持続的に支える仕組みを構築することは、当該センターが全学的枠組みのなかで取り組むべき喫緊の課題である。

佐賀地域にとどまらない国内外市民社会への研究成果還元発信、文理融合と連繫（教育・経済・医学・理工学・農学・芸術）強化により、本学デジタルヒューマニティ基盤の一翼を担うことも期待される。研究センターとしてハード、ソフト両面における改善をすすめ、学生への教育還元、国内外への成果普及に向け積極攻勢に出ることが期待される。

総合評価結果

令和 3年 3月17日

研究センター等名	佐賀大学肥前セラミック研究センター
(英 文 名)	Ceramic Research Center, Saga University
設 置 期 間	平成29年 4月 1日 ~ 令和 4年 3月31日

1. 研究センター等の設置又は研究目的・概要

佐賀大学における焼物に関する教育・研究機関として、セラミック産業における“芸術－科学－マネジメント”が融合した国際学術研究拠点として産業・地域へ貢献するための研究開発を行い、人材育成及び地域活性化に貢献する。学内外における異分野教員・研究者が横断的に協力し、さらに国内外の陶磁器関連機関等との連携により、“やきものイノベーション”を創出することを目的とする。

2. 総合評価結果

(評価)

「研究組織の形成状況」としては、人事面で発足後の交代・退職等が相次いだものの、自助努力が見られて機能し始め、併任・協力教員が多くを占める中で、本センターの肝である「異分野融合型」の有機的連携が起動し始めている。

併任教員の負担も大きい中で、異分野融合型としての指針に沿った新たな研究・活動にも取り組み、「研究計画」「教育・研究」「専門的・社会的評価」「学術的知見の状況」の各評価項目いずれにおいても積極的かつ特徴的な活動・成果も認められ、各部門・各教員の強みを生かしたローカル・グローバル両面での成果も出ている。

学生や地域の関係者にもその取り組みが還元され、地域活性化や広い視野での人材育成にもつながり始めている。(評価区分：SS)

(評価コメント)

今年度新たに専任教員2名が加わったものの、当初は併任教員のみで構成されており、今後の専任の活動、増員の可否によるところも大きく、今回の評価期間は各専門領域においての実績をもとに軌道に乗り始めた段階であり、3部門の有機的融合はこれから本格化するものとして期待される。

当センターの役割が短期的・単発的・個別な活動で済まないことは言うまでもなく、地域的にも、素材としてもやきものを中・長期的なヴィジョンで捉え、業界・行政も交えたローカル・グローバル両面に通じる成果が求められる。決して成長産業とは言えない状況でも、地域貢献や地元からの評価にとどまらず、日本の磁器発祥の地から国内外に対し、連携強化に伴う有益な発信を続けられたい。